

まつぼっくり



宇城市立三角小学校
学校だより 第70号
文責 校長 西村羊治
令和8年1月22日

学校教育目標「支え合い・学び合い、多様な達成感を体感し、ふるさとを愛する児童の育成」

「え～っ、もう終わりなの～」

上記の言葉は、4年生のある児童が、1月21日（水）の2時間目の国語の授業最後に発した言葉です。「授業が楽しかった」「もっとやりたい」という学習に対する成就感・意欲・向上心がうかがえます。県学力学習調査の1チェックの中の項目に「夢中になり記憶に残った授業がありますか。」という質問事項があります。数年前のデータでは、児童の回答はあまり高くありませんでした。小学生は毎日授業に参加しています。学校生活において一番多いのが授業です。私は15年くらい担任から外れていますが、担任をしていたときは、子どもたちに「つまらない」「楽しくない」「意欲がわかない」等と思わせたくなかったのも、それなりの教材研究をしてきたつもりです。でも納得いかない授業が多かったのは事実です。



対話

今回の授業は国語の説明文でした。日本とアメリカの数の数え方の違いについて筆者がのべています。例えば、にんじんは1本、2本と数えますが、アメリカの小学生にはその数え方には違和感があり、にんじんはガリガリかじるから1ガリ、2ガリ、オレンジ色だから1オレンジ、2オレンジ、にんじんが好きだから1好き、2好きと数えた方がいいと言うわけです。日本人としては考えられないことです。文化の違い、言語の違いは大きなものがあると思わされます。そこで、本校の4年生は、リコーダーや宿題、牛乳等をどのように数えたらいいかをグループ毎に考え話し合いました。おもしろい考えがたくさん出てきます。リコーダーは穴が開いているから、1ちくわ、2ちくわ等、おもしろいですね。この数え方ならリコーダーではなく聞いた人全員がちくわだと思えます。でも子どもたちの発想や考えはすばらしいしどんどん広がっていきます。Yes か No かのクローズドクエスションではなくオープンクエスションなので、対話で対立することなく、それぞれの意見にみんながうなずいています。自分はもちろん互いの考えや発想が受け入れられ達成感が生まれます。

日本語には約500の数え方があるそうです。しかし、現在はその中の100ぐらいの数え方しか使用されていないようです。約17年前に三浦しをんさんが「舟を編む」という小説を書きました。馬締（まじめ）さんという主人公が、チームで膨大な時間をかけて辞書を作るという内容です。辞書を作る工程で私が印象に残っていることとして、言葉は人間がつくり出したものであること、変化したり消えていったりする言葉もあること、これから新たに生まれる言葉もあることでした。

このことと関連させると、日本の数え方がいいとかよくないとか、アメリカの数え方がいいとかよくないとかではなく、どちらも尊重されるよい文化であることが言えます。そして、言葉は時代や文化の変化によって生まれたり変わったりなくなったりしていくものです。にぎりずしの一貫という数え方は、昭和の終わりに生まれた数え方で、新しいものです。これからもいろいろな言葉が生まれたり変化したり、逆に消えていったりしていくことでしょう。それが言葉や文化です。

今回の授業で4年生は、自分の考えを自信を持って伝え、友達の考えをしっかりと受け取っていました。授業の最後には、「え～っ、もう終わりなの～」という言葉が聞かれ、子どもたちにとって記憶に残る授業になったと思います。



発表